

1. はじめに

前稿「白居易律詩類型とその影響」を執筆の時に、興味深いことがわかった。それは、以下の二点であった。

① 各詩人は自分の作った「韻字ユニット」を何度も繰り返して、自分の作品に使って良い。もちろん、この「韻字ユニット」と近似した表現も、この範疇に含まれる。したがって、これも何回も使える。この点で、自分の作り出したユニークな「韻字ユニット」は詩人にとって重要な財産といえるものであった。

② ①のちょうど正反対になる事項となるが、他詩人の作り出した「韻字ユニット」を自分の作品に使うことははばかれることであつたらしい。

もっとも、この②に関わる時代は、ある時代までということになる。もちろん、この他詩人の「韻字ユニット」をどのように使うのかは、幅があり、近似は可能だが、同一は不可とか、いろいろな段階があつたようだ。本稿は、①の前提がどのように②が変化していったかを、杜甫を出発点にして考察を加えることを目的としたい。

最初の導入から、いきなり本論に入ってしまったようなことになる失礼をお許し願いたい。そこで、上の前提となるそれぞれの項目について、まず解説をしておきたい。

杜甫や白居易の律詩の韻字を見ていると、特定の文字に偏っている。これをどの韻でそうになっているのかを調べると、偏りが集中する韻とそうでもない韻とに分けられる。これに関する具体的な数値については、「白居易律詩対偶論」で示した。高いものでは、特定の韻字が80%を超えるのがある。つまり、最初から用いられる韻字が決まっているケースが多い。こうなると韻字一字の単独ではなく、律詩一句における下三字の塊で、構成を考えていることがわかった。この一句内の韻字を含む下三字を「韻字ユニット」と命名し、これを中心に考えることにした。すると、上の①に見えるような事象が見えてきた。こうしたことは、韻字一字に注目しただけではわからない。そして、それに付随して、②に当たる他詩人の「韻字ユニット」をそのまま、あるいは近似したものの利用することを避けるということもわかった。

もっとも、苦吟派といわれる詩人は、①の自分で作り出したオリジナルの再使用を嫌う傾向がある。そうなると、何人かの詩人をリストアップして、「韻字ユニット」の他詩人利用があるかどうか、それもどういう傾向があるのかを調べないといけない。なぜなら、確実に②の事柄が推し進められたら、後世の詩人ほど韻字が限定されている以上、選択の幅がなくなってくることになるからである。ただし、唐詩を通時的に見てみれば、晩唐にいたるまで、律詩は作られ続けてきた。その過程でどのようなことが上記「韻字ユニット」に関する事柄でどのようなことが起こったのかを、概観することが本稿の目的である。

2. 詩人の選択と「韻字ユニット」の選定

この課題に取り組むに当たって、どの詩人にするのかという問題に向き合わざるをえない。できるだけ多い方が良いということになる。このため『全唐詩』が理想的だいえなくもない。しかし、その前の予備調査をしないと、そうした課題に答えるだけの有用な研究であるかどうか、なんともいえないことになる。そこで、何人かの詩人を選んで、上記

課題の考察を試みることにする。その詩人の選定が、不十分なものであることは十分に承知している。また、その取り上げた範囲に関しても、範囲が統一されていないことも批判されうる点となるであろう。あくまで、ここに示した結果は、そうした問題点を含んでいることを承知の上で見ても、新たな視点を獲得するとするならば、それなりの意味を有するといえるであろう。

以上、前置きが長くなった。まず、詩人について述べることにする。出発点を杜甫にする。そもそもの今回研究点が律詩だからである。作品数やその質から、杜甫を出発点としたい。ただし、杜甫の平声「韻字ユニット」に関して、最初は律詩のみであったが、絶句・排律といった近体詩ばかりでなく、古体詩での例も含めてある。調べる内に、杜甫の後世影響の姿を見ることによって、逸脱してしまった。これを改めるべく他詩人も同様にすべきであるが、能力不足で手が回らなかった。

杜甫の次に、劉長卿を扱うことにした。盛唐から中唐にかけて、人々にもっとも受け入れられた詩人である。同時代的には杜甫よりも上の評価であったといえる。ただし、彼について調べたのは、律詩のみである。こうした補助線を入れることで、杜甫との比較ができることを望んでいる。

劉長卿の次が、孟郊を持ってきた。彼は近体詩をあまり作らず、もっぱら古体詩が多い。ここでの平声「韻字ユニット」も彼の古体詩からのものである。本来ならば、孟郊を省いても良かったのであるが、後に来る賈島との関連から、並べてある。

その次に、白居易を置いた。彼の作品数は杜甫を勝る。近体詩のすべてを調べてある。もちろん、排律も含めた。ただし、古体詩にまでは手が回らなかった。そして、白居易をここに置いたことは、結論を先に述べるようであるが、なかなか有効であった。これについては、後に述べることにする。

白居易と全くの同時代人である賈島を次に置く。賈島は有名な苦吟詩人である。本論の関連でいけば、賈島は「韻字ユニット」の部分で大いに苦吟している。「白居易律詩類型とその影響」での①の結論にあるように自分の編み出した新たな表現を再利用することに慎重であった。その上、それと類似する表現を使うこともやはり慎重であった。こうした点から、本論の「韻字ユニット」継承関係の中で、賈島がどのような位置にあるのかを調べるためである。なお、彼の詩は、律詩のみの収集であることを述べておく。さらに、白居易と賈島とが同じ「韻字ユニット」が現れた時、とりあえず少しばかり先に生まれた白居易の方を優先させた。ただし、このことは、賈島が白居易をまねたということを意味するものではない。あくまで、整理の都合上の処理であることを表明する。後に、両者対比の上で、どう考えるのかを述べることにしたい。

最後に、白居易以降、「韻字ユニット」がどのようなようになったのかを見るために、杜牧と李商隠について、見てみた。いずれも調査範囲は、律詩と絶句のみである。

最後にテキストについて、補足する。杜甫の「詳注本」以外は、四部叢刊の別集本を使った。他のテキストを使えば、いささか違うところもあるであろうが、大勢に変わらないと考える。

### 3. その結果の表示と分類

以下、上記の詩人作品を使った結果を示したい。本来ならば、そのすべてを例示すべき

であろう。個々の「韻字ユニット」ごとにおもしろい点がある。しかし、紙幅の関係上、そうした表示は別の機会に譲ることにして、得られた「韻字ユニット」の継承が三つの形に分類できることをまず報告したい。それは、一つ目が扇形に広がるタイプ。二つ目がずんどうタイプ。三つ目のが鳴かず飛ばずの全く広がりのないタイプ。以上の三タイプに分類できる。

まず、一つ目の扇形タイプの例を示す。

	杜甫	劉長卿	孟郊	白居易	賈島	杜牧	李商隱
風	32+16	8	25	62	13	25	22
更*風	更*風	更*風					
*秋風	*秋風	*秋風	⇒	*秋風	⇒	*秋風	
*北風	*北風	*北風	⇒	⇒	*北風		
起*風	⇒	起*風	⇒	⇒	⇒	⇒	起*風
起秋風	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	起秋風	
*寒風	⇒	*寒風					
不*風	⇒	不*風					
*清風	⇒	*清風	*清風	*清風	⇒	⇒	*清風
*古風	⇒	*古風	*古風	*古風	⇒	*古風	
皆*風	⇒	皆*風					
*細風	⇒	*細風					
*里風	⇒	*里風					
多*風	⇒	多*風	⇒	⇒	⇒	多*風	
易*風	⇒	易*風	易*風	易*風			
萬*風	⇒	萬*風					
逆*風	⇒	⇒	逆*風	逆*風	⇒	⇒	逆*風
*頭風	⇒	⇒	*頭風	*頭風			
*國風	⇒	⇒	*國風	*國風			
*隨風	⇒	⇒	*隨風	*隨風			
落*風	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	落*風	
舞*風	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	舞*風	
動*風	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	動*風	
待*風	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	待*風
繼*風	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	繼*風
度*風	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	度*風
		*春風	*春風	*春風	*春風	*春風	*春風
		占*風	占*風				
		向*風	⇒	向*風	⇒	向*風	
		又*風	⇒	又*風			

有*風	⇒	有*風	⇒	有*風	有*風
*上風		*上風			
*月風		*月風			
*花風		⇒	⇒	*花風	
*歸風		⇒	⇒	⇒	*歸風
		入座風	⇒	入座風	
		滿座風	⇒	⇒	滿座風
		*晚風	⇒	*晚風	
		正秋風	⇒	正秋風	
		盡*風	⇒	⇒	盡*風
		欲*風	⇒	⇒	欲*風
		*好風	⇒	⇒	*好風
		北窓風	⇒	⇒	北窓風
			⇒	一*風	一*風
			⇒	*夜風	*夜風
				*帶風	*帶風
				*西風	*西風

東韻の「風韻字ユニット」を取り上げた。詩人の下の数字は、各ユニット数である。杜甫の場合、前の数が近体詩での数であり、後の数が古体詩での数である。本来ならば、複数例ある場合は、そうした数も示したいが、煩雑となるので示していない。

上の「風」での例からわかるように、扇形となるのは、杜甫・白居易・杜牧・李商隠での「韻字ユニット」の使用例が多い。これらの数値が目安になることがわかる。これと正反対の“鳴かず飛ばずタイプ”は、杜甫・白居易・杜牧・李商隠の数値が低い。ただし、すべての詩人の数値が低いのであれば、ここでの対象とならない。すなわち、杜甫が白居易の使用例が多いが、他の詩人は少ないものがここでの“鳴かず飛ばずタイプ”に該当する。杜甫が「韻字ユニット」を多用するが、他詩人は少ない例をしてみる。

	杜甫	劉長卿	孟郊	白居易	賈島	杜牧	李商隠
違	14+2	3	5	5	0	0	3
故*違	故*違	故*違	故*違				
心*違	⇒	⇒	心*違				
*物違	⇒	⇒	*物違				
*相違	⇒	⇒	*相違				
莫相違	⇒	⇒	⇒	莫相違			
*心違	⇒	⇒	⇒	*心違			
意多違	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	意多違
*事違	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	*事違

萬\*違 ⇒ ⇒ ⇒ ⇒ 萬\*違  
 \*有違 \*有違

次に、白居易が「韻字ユニット」を多用するが、他詩人は少ない例を見てみる。

	杜甫	劉長卿	孟郊	白居易	賈島	杜牧	李商隱
餘	9	0	6	20	8	3	3
*有餘	⇒	*有餘	*有餘	⇒	⇒	*有餘	
萬*餘	⇒	⇒	萬*餘				
十*餘	⇒	⇒	十*餘	十*餘	十*餘		
*年餘	⇒	⇒	⇒	*年餘			
		閑有餘	閑有餘				
		*無餘	⇒	*無餘			
			萬里餘	萬里餘			
			一*餘	一*餘			
			*畝餘	*畝餘			
			*十餘	*十餘			

このように先の扇形とは大きな違いがある。残る“ずんどう形”は扇形と鳴かず飛ばず形との中間にあるものといえる。そこで、各詩人の用いる「韻字ユニット」での数値で、それぞれのタイプを分類することができる。そこで、扇形タイプ(これを下記表では $\alpha$ で示す)を、杜甫用例を20以上、白居易用例を30以上、杜牧・李商隱用例を10以上のものとする。下位の鳴かず飛ばず形(これを下記表では $\Sigma$ で示す)を、杜甫9例以下、白居易17例以下のどちらかであって、杜牧・李商隱のいずれも7例以下とする。中間のずんどうタイプ(これを下記表では $\beta$ で示す)は、それらの中間の数値ということになる。ただし、これらの数値はあくまで目安である。

以下、東韻から例示する

#### 東韻

韻字	杜甫	白居易	杜牧	李商隱	タイプ
東	10	20	8	9	$\beta$
通	4	6	3	8	$\Sigma$
同	23	43	5	6	$\Sigma$ に近い $\beta$
空	8	40	15	12	$\alpha$ に近い $\beta$
紅	19	19	5	4	$\Sigma$ に近い $\beta$
翁	20	56	2	2	$\Sigma$ に近い $\beta$
宮	9	5	10	2	$\Sigma$

風	32	62	25	22	$\alpha$
中	31	93	22	13	$\alpha$

支・脂・之韻

韻字	杜甫	白居易	杜牧	李商隱	タイプ
知	16	97	12	10	$\alpha$
池	12	29	1	5	$\beta$
枝	12	45	7	13	$\alpha$ に近い $\beta$
悲	19	16	3	3	$\Sigma$
遲	26	66	12	12	$\alpha$
衰	1	21	1	1	$\Sigma$
期	16	35	12	19	$\alpha$ に近い $\beta$
絲	13	32	3	4	$\Sigma$ に近い $\beta$
詩	22	62	7	2	$\beta$
時	35	150	23	26	$\alpha$

微韻

韻字	杜甫	白居易	杜牧	李商隱	タイプ
微	18	10	4	5	$\Sigma$
飛	25	25	0	8	$\beta$
稀	26	27	5	9	$\beta$
衣	22	29	12	10	$\alpha$
歸	41	47	15	17	$\alpha$
違	14	5	0	3	$\Sigma$

魚韻

韻字	杜甫	白居易	杜牧	李商隱	タイプ
魚	18	14	4	2	$\Sigma$
居	16	15	3	4	$\Sigma$
書	19	24	6	7	$\beta$
餘	9	20	3	3	$\Sigma$
如	10	26	4	4	$\Sigma$ に近い $\beta$

灰・咍韻

韻字	杜甫	白居易	杜牧	李商隱	タイプ
杯	14	41	6	8	$\alpha$ に近い $\beta$
臺	17	20	11	11	$\alpha$
開	35	86	22	15	$\alpha$
才	6	19	6	7	$\Sigma$
迴(廻)	16	55	11	14	$\alpha$

回	13	3	7	2	$\Sigma$
來	49	117	32	26	$\alpha$

眞・諄・臻韻

韻字	杜甫	白居易	杜牧	李商隱	タイプ
頻	18	21	9	4	$\beta$
貧	8	30	0	1	$\Sigma$
親	16	47	1	2	$\beta$
新	41	42	10	10	$\alpha$
旬	1	17	0	0	$\Sigma$
塵	24	60	13	15	$\alpha$
春	40	130	21	15	$\alpha$
身	29	128	5	4	$\beta$
巾	14	26	0	1	$\Sigma$ に近い $\beta$
神	21	13	2	4	$\Sigma$
人	69	216	31	24	$\alpha$

文韻

韻字	杜甫	白居易	杜牧	李商隱	タイプ
分	13	12	10	12	$\beta$
聞	21	17	10	10	$\beta$
君	7	37	9	9	$\beta$
雲	28	30	18	14	$\alpha$
群	22	7	2	8	$\Sigma$

寒・桓韻

韻字	杜甫	白居易	杜牧	李商隱	タイプ
難	17	26	6	3	$\beta$
看	12	54	3	3	$\beta$
寒	21	27	9	8	$\beta$
官	2	24	0	2	$\Sigma$

刪・山韻

韻字	杜甫	白居易	杜牧	李商隱	タイプ
間	20	44	3	4	$\beta$
顔	12	14	2	2	$\Sigma$
閑	0	39	5	2	$\Sigma$
還	17	33	4	2	$\beta$
山	27	52	7	3	$\alpha$ に近い $\beta$
關	13	16	2	4	$\Sigma$

先・仙韻

韻字	杜甫	白居易	杜牧	李商隱	タイプ
邊	25	18	4	2	$\Sigma$ に近い $\beta$
眠	12	47	6	5	$\Sigma$ に近い $\beta$
天	32	57	11	10	$\alpha$
年	26	98	15	5	$\alpha$
仙	6	25	3	1	$\Sigma$
前	13	55	7	1	$\beta$
錢	7	19	3	3	$\Sigma$
船	31	25	9	3	$\alpha$ に近い $\beta$
絃	2	20	0	5	$\Sigma$
然	17	39	8	4	$\alpha$ に近い $\beta$
傳	15	10	2	1	$\Sigma$
煙(烟)	10	12	10	2	$\Sigma$ に近い $\beta$

歌・戈韻

韻字	杜甫	白居易	杜牧	李商隱	タイプ
波	15	19	3	6	$\Sigma$ に近い $\beta$
歌	14	40	5	6	$\beta$
多	33	65	8	11	$\alpha$
何	19	55	3	7	$\beta$
過	13	16	3	6	$\beta$

麻韻

韻字	杜甫	白居易	杜牧	李商隱	タイプ
家	19	64	13	12	$\alpha$
斜	15	35	8	8	$\beta$
花	23	58	12	16	$\alpha$
沙(砂)	17	8	6	0	$\Sigma$

陽・唐韻

韻字	杜甫	白居易	杜牧	李商隱	タイプ	
長	36	37	10	9	$\alpha$	
霜	6	32	5	6	$\Sigma$ に近い $\beta$	
香	21	26	11	18	$\Sigma$	継承少なし
陽	5	24	4	4	$\Sigma$	
堂	14	9	4	8	$\Sigma$	
郎	12	21	2	5	$\Sigma$	継承少なし
光	15	32	5	7	$\Sigma$	継承少なし



庚・耕・清韻

韻字	杜甫	白居易	杜牧	李商隱	タイプ
明	24	46	9	7	$\alpha$ に近い $\beta$
名	17	22	6	6	$\beta$
輕	13	23	2	7	$\beta$
行	23	76	7	5	$\alpha$ に近い $\beta$
清	25	15	4	11	$\beta$
情	30	80	8	10	$\alpha$
生	38	59	8	8	$\alpha$ に近い $\beta$
聲	9	65	14	10	$\alpha$
成	10	31	6	3	$\Sigma$
城	35	30	6	7	$\beta$

尤・侯・幽韻

韻字	杜甫	白居易	杜牧	李商隱	タイプ
秋	29	33	25	6	$\alpha$
州	22	37	6	4	$\beta$
愁	23	49	13	17	$\alpha$
休	10	26	7	9	$\beta$
憂	11	16	0	5	$\Sigma$
遊	24	56	7	7	$\alpha$ に近い $\beta$
流	22	25	13	12	$\alpha$
舟	19	23	6	4	$\Sigma$
頭	28	65	14	7	$\alpha$
樓	22	33	16	18	$\alpha$
鷗	10	2	0	0	$\Sigma$

侵韻

韻字	杜甫	白居易	杜牧	李商隱	タイプ
金	11	14	1	6	$\Sigma$
琴	6	16	5	3	$\Sigma$
吟	15	13	5	3	$\Sigma$
心	28	52	9	8	$\alpha$ に近い $\beta$
深	29	42	7	10	$\alpha$
林	14	17	3	4	$\Sigma$

以上、それぞれの「韻字ユニット」がどのタイプに属するのかを大まかに見てきた。ただ、注意しておきたいことは、各「韻字ユニット」が後世の詩人にどの程度影響を与えたかであって、それぞれの「韻字ユニット」の持つ文学上の貢献を云々するものではないこ

とを力説しておきたい。この点を十分注意した上で論を進めていきたい。

上記、表の中でαタイプとされたものをここであげると、

東韻「風・中」 / 支・脂・之韻「知・遲・時」 / 微韻「衣・歸」  
 灰・咍韻「臺・開・迴(廻)・來」 / 眞・諄・臻韻「新・塵・春・人」  
 文韻「雲」 / 先・仙韻「天・年」 / 歌・戈韻「多」 / 麻韻「家・花」  
 陽・唐韻「長」 / 庚・耕・清韻「情・聲」 / 尤・侯・幽韻「秋・愁・流・頭・樓」  
 侵韻「深」

の30ユニットとなる。この一つ「風」の継承関係を上に引いてある。これを見ると、白居易の立場がとても面白い。なお、「風」に関しては、孟郊と杜甫との相似が多いようであるが、これはむしろ例外に属する。多くは、杜甫をはじめとする先行詩人の「韻字ユニット」を継承し、それを下の杜牧や李商隱に流すというような形になっている。本来ならば、これら30の表を示すべきであるが、より簡便にわかりやすい形で次に示すことにしたい。

#### 4. 全く同一の「韻字ユニット」の継承について

先に述べた二つの唐代での条件を思い起こそう。①自己開発の「韻字ユニット」再利用可能と②他詩人の作り出した「韻字ユニット」を忌避する、というものであった。ところが、白居易は、②の条件を守ることをしていないといえる。これらの例を上記30ユニット内から拾い出してみよう。

杜甫	劉長卿	孟郊	白居易	賈島	杜牧	李商隱
起秋風	⇒	⇒	⇒	⇒	起秋風	
			入座風	入座風		
			滿座風	⇒	⇒	滿座風
			正秋風	⇒	⇒	正秋風
			北窓風	⇒	⇒	北窓風
	白雲中	⇒	白雲中	白雲中		
	古木中	⇒	⇒	古木中		
	夕照中	⇒	⇒	⇒	夕照中	
		天地中	天地中			
			夕陽中	⇒	夕陽中	夕陽中
			明月中	⇒	明月中	
			月明中	⇒	月明中	
			到心中	到心中		
			道路中	道路中		
人不知	⇒	⇒	人不知	⇒	人不知	
			自不知	⇒	自不知	自不知
			未可知	⇒	未可知	

			誰得知	⇒	誰得知	
亦不遲	⇒	⇒	亦不遲			
			何太遲	⇒	何太遲	
不同時	⇒	⇒	不同時			
老大時	⇒	⇒	老大時			
欲夜時	⇒	⇒	欲夜時			
	日斜時	⇒	日斜時			
			無限時	無限時		
			夕陽時	夕陽時		
			早秋時	早秋時		
			搖落時	搖落時		
			酒醒時	⇒	⇒	酒醒時
老萊衣	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	老萊衣
何處歸	何處歸					
人未歸	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	人未歸
醉不歸	⇒	⇒	醉不歸			
故園歸	⇒	⇒	⇒	故園歸		
	幾人歸	⇒	⇒	⇒	幾人歸	
		猶未歸	猶未歸			
			莫放歸	莫放歸		
望鄉臺	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	望鄉臺
門未開	⇒	⇒	門未開			
	夕陽開	⇒	夕陽開			
			劍門開	劍門開		
			四門開	四門開		
			次第開	⇒	次第開	
			一枝開	一枝開		
幾時迴	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	幾時迴
		去不迴	去不迴			
渡江來	⇒	⇒	渡江來			
出城來	⇒	⇒	出城來			
故人來	⇒	⇒	⇒	故人來		
一人來	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	一人來
細雨來	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	細雨來
	何處來	⇒	⇒	⇒	何處來	
			始歸來	⇒	始歸來	
			命不來	⇒	命不來	
竹葉新	⇒	⇒	竹葉新			

天氣新	⇒	⇒	天氣新			
	柳條新	⇒	柳條新			
			白髮新	⇒	⇒	白髮新
			日日新	⇒	⇒	日日新
在風塵	⇒	在風塵				
出風塵	⇒	⇒	出風塵			
	日生塵	日生塵				
			幾微塵	⇒	⇒	幾微塵
五湖春	五湖春					
楚水春	楚水春					
	又一春	⇒	又一春	⇒	又一春	
	欲暮春	⇒	欲暮春			
	故年春	⇒	⇒	⇒	⇒	故年春
			二三春	二三春		
鳴向人	鳴向人					
行路人	⇒	行路人				
爲何人	⇒	⇒	爲何人	⇒	爲何人	爲何人
白頭人	白頭人	⇒	白頭人			
兩三人	⇒	⇒	兩三人			
太平人	⇒	⇒	⇒	⇒	太平人	
有故人	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	有故人
不無人	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	不無人
	眼中人	⇒	眼中人			
	覓何人	⇒	覓何人			
	不見人	⇒	不見人	⇒	不見人	不見人
	萬里人	⇒	⇒	⇒	萬里人	
			是何人	是何人		
			幾許人	⇒	幾許人	
			世間人	⇒	⇒	世間人
半入雲	⇒	⇒	半入雲			
一片雲	⇒	⇒	⇒	⇒	一片雲	一片雲
萬重雲	⇒	⇒	⇒	⇒	⇒	萬重雲
	出白雲	⇒	出白雲			
			望白雲	望白雲		
紫微天	⇒	⇒	紫微天			
八月天	⇒	⇒	八月天			
艷陽天	⇒	⇒	艷陽天			
峽中天	⇒	⇒	峽中天			

			沈寥天	沈寥天		
			月明天	⇒	月明天	
			薄暮天	⇒	薄暮天	
			明月天	⇒	明月天	
			暮雨天	⇒	暮雨天	
					水接天	⇒
					水接天	
已三年	⇒	⇒	已三年	已三年		
美少年	⇒	⇒	美少年	美少年		
三十年	⇒	⇒	三十年	三十年		
		白髮年	白髮年			
			是何年	⇒	是何年	
			二三年	⇒	二三年	
					已多年	⇒
					已多年	
白雲多	白雲多	⇒	白雲多			
	故人多	⇒	故人多			
			黃葉多	黃葉多		
			見月多	⇒	見月多	
即爲家	⇒	⇒	⇒	⇒	即爲家	
	獨一家	獨一家				
	有人家	⇒	⇒	⇒	有人家	
			富貴家	⇒	富貴家	
			有幾家	⇒	⇒	有幾家
			曲江花	曲江花		
			後庭花	⇒	後庭花	後庭花
			一樹花	⇒	⇒	一樹花
			洛陽花	⇒	⇒	洛陽花
			石榴花	⇒	⇒	石榴花
道路長	⇒	道路長	道路長	道路長		
日月長	⇒	⇒	日月長	⇒	日月長	
歲月長	⇒	⇒	歲月長			
日初長	⇒	⇒	日初長			
春草長	⇒	⇒	⇒	春草長		
白日長	⇒	⇒	⇒	⇒	白日長	
	晝夜長	⇒	晝夜長			
			秋夜長	⇒	秋夜長	
故鄉情	⇒	⇒	故鄉情			
獨含情	⇒	⇒	⇒	⇒	獨含情	
	不勝情	⇒	不勝情			

	萬里情	⇒	萬里情		
	識此情	⇒	識此情		
	遠客情	⇒	⇒	⇒	遠客情
			豈無情	⇒	豈無情
			兩地情	⇒	兩地情
斷腸聲	⇒	⇒	斷腸聲		
		動秋聲	⇒	⇒	動秋聲
		第一聲	⇒	⇒	第一聲
十經秋	⇒	⇒	⇒	⇒	十經秋
已驚秋	⇒	⇒	⇒	⇒	已驚秋
	海門秋	⇒	⇒	⇒	海門秋
			三十秋	三十秋	
不禁愁	⇒	⇒	不禁愁		
翠黛愁	⇒	⇒	翠黛愁		
		別離愁	⇒	⇒	別離愁
東北流	⇒	東北流			
大江流	⇒	⇒	大江流		
向東流	⇒	⇒	⇒	⇒	向東流
	水自流	⇒	⇒	⇒	水自流
居上頭	居上頭	⇒	居上頭		
雪滿頭	⇒	⇒	雪滿頭		
曲江頭	⇒	⇒	曲江頭		
已白頭	⇒	⇒	已白頭	⇒	已白頭
			亦白頭	⇒	⇒
十二樓	十二樓				
庾公樓	⇒	⇒	庾公樓		
岳陽樓	⇒	⇒	⇒	⇒	岳陽樓
			百尺樓	百尺樓	百尺樓

以上、該当する例を拾い出してみた。侵韻「深」だけには、該当例がなかった。

これらを通覧して、杜甫の送り出しがいかにかが多かがよくわかる。それと同時にその多くを白居易が受け止めている。つまり、②の先行詩人が生み出した「韻字ユニット」の利用を慎むという規則が破られたことになる。それ以上に先行詩人のものを積極的に利用することを白居易は実践していたといえる。このことが呼び水となって、杜牧・李商隱も積極的に先行詩人の「韻字ユニット」を利用している。杜甫を基準とする場合、劉長卿も孟郊も杜甫の「韻字ユニット」利用は極端に少ない。また、賈島も杜甫のその利用は少ない。ただし、白居易からの利用は、極端に多い。この点に関しては、次節で述べる。

本論の結論として、唐代近体詩での②の忌避、すなわち他詩人の「韻字ユニット」を使うこと、これに対して大きな変更を加えたのは、白居易であろうといえる。こうした変更

は、後の杜牧や李商隱の作詩に大きな影響を及ぼしたといえる。この姿が上の一覧表からもうかがえるのである。

#### 5. 白居易・賈島、引用はどちらかからどちらだろうか

上の表でも、同時代人、白居易と賈島の相互間の一致が目立った。これが三字の「韻字ユニット」での二字一致となるとさらに多くなる。もし、当時著作権が確立していたら、法廷闘争になったと思われるレベルである。ここは司法でないので、この現象をどう考え、どう理解したらすんなりいくのかを考えたい。

そこで、「白居易律詩類型とその影響」の時に作成した表を元に、白居易・賈島・杜牧・李商隱のそれぞれがどの程度オリジナリティを持っているのかを調べた。3. で提出した「風」の表を例にとれば、先行詩人に重なる場合は、“オリジナリティなし”と認定した。つまり、この表に見えない「韻字ユニット」が“オリジナリティあり”とする。かなり恣意的であるとの批判は十分に受ける。そうした場合、際限がなくなるためのやむ得ない措置であることを理解いただきたい。表の上段に、賈島が白居易をすべて「まねた」として、その数を見てみたい。また、下段を白居易が賈島をすべて「まねた」とする。

白居易(全)	白居易(独)	賈島(全)	賈島(独)	杜牧(全)	杜牧(独)	李商隱(全)	李商隱(独)
4.723	2.599	732	349	936	346	907	310
/	55%	/	47%	/	36%	/	34%
4.723	2.457	732	491	/	/	/	/
/	52%	/	67%	/	/	/	/

以上のような結果となった。白居易の場合、上段でも下段でもオリジナリティの比率に大きな変化はない。これに対して、賈島の場合は、20%も上下する。比喻として上品でないが、大企業と中小企業の差に見えてしまう。苦吟派の賈島が、杜牧や李商隱に近くなるというのは、どうも実情に合わない。賈島の先輩、孟郊でもオリジナリティは70%ぐらいになる。それに近い67%の方が実情に近いのではないかと考えられる。杜甫ばかりでなく、劉長卿・孟郊からもせっせと抜いている白居易にしてみれば、賈島から抜くことも、それほど抵抗はなかったであろう。逆に、賈島にしてみれば、杜甫からも遠慮しいしい抜いているのに対して、白居易から大量に抜くというのは、不自然である。

ここまでぐらいしか、実情には肉薄できないが、唐代を通じて、「韻字ユニット」のオリジナリティの考えかたが変化していったことがわかる。

以上、「韻字ユニット」を通じて、杜甫と白居易の貢献の姿を見てきた。